

亀岡誠著『現代日本人の絆 ～「ちょっとしたつながり」の消費社会論』

(日本経済新聞出版社、2011年)

昨年3月11日の東日本大震災により、多くの日本人が改めて気が付いたことは、人と人との絆、つながることの大切さと意味であった。そして、新聞報道により確認され、また、有識者によって改めて指摘されたこうした価値観は、これまで日本人の間で伝統的に重視されてきた絆の意義を再確認することとなった。

しかし、価値観としての絆、つながりということについて押さえておくべきことは、時代の流れ、すなわち社会的、経済的環境の変化の中で、期待される絆、つながりの中身が変化したのではないかということである。絆の中で最も代表的なものとしてあげられるのが家族だが、近年のパラサイト・シングル化や単身世帯の急増などにより、旧来の性別役割分業を基礎とした戦後家族モデルは減少の一途を辿っている。こうした「仕事は夫、家事・育児は妻」という分業体制の中で、豊かな生活と将来をめざす家族モデルが行き詰まったことは明らかである(山田昌弘・塚崎公義共著『家族の衰退が招く未来』東洋経済新聞社、2012年)。

こうした中、日本人もしくは日本社会は、崩れ始めている家族の再生を図ることにより絆、つながりを確保していくべきなのだろうか。山田昌弘・塚崎公義の両氏はこうした立場を取っており、家族の再生のため労働環境の改善とともに、結婚支援などを行政に期待している。

これに対し、本書では、「学校・会社・家族」といった近代的絆が持っていた本来の役割が変容を余儀なくされる戦後消費社会の急速な変化を示し、近代的絆がかつてのような役割を果たすことはもはやないとみている。そして、隣人、友人、同好、社会との間の「ちょっとしたつながり」、「ちょっとした絆」に、新しい絆の将来像を追い求めていくべきだと主張している。本書は、家族は主要な共同体のひとつであり続けながらも唯一のよりどころではもはやないという立場から、新しい絆の役割を重視し、今後の展望に期待している。

このように近代的絆に代わって筆者が重視するのが「隣人」、「友人」、「同好」、そして「社会」の絆である。いずれも「学校・会社・家族」のような強固で永続的な絆ではないが、こうした非組織的で不定形な「ちょっとした絆」こそが、人間関係に適度の距離感を期待する現代日本人の期待に合致し、その結果、人間の絆とつながりに好影響をもたらし、そして、幸福感を高めると評価している。

筆者は、「ちょっとした絆」が果たす役割を証明するため、現代日本人における絆の代表例としてNPO団体での活動やソーシャルビジネスなど多くの事例を紹介している。

しかし、紹介された事例の多くは決して安定的、永続的ではなく、一時的、流動的な要素を多く含んでいるように思われる。そのため、「学校・会社・家族」といった近代的絆と並ぶ日本人の代表的な絆となるかどうかは保証されない。こうしたことから、筆者の立論はいわば、「ちょっとした絆」の「待望論」というものであろうと思われる。

日本人の絆として「学校・会社・家族」といった近代的絆の再生を図ることを本道とすべきか、それとも、現代に適合するものとして「ちょっとした絆」の広範囲な構築を目指すべきなのか、大震災後の日本人のあり方を考えるための注目すべき論点といえるだろう。(西村博史)